



文久壬戌京坂及關東

之形勢
從正月及
去月

養浩堂手記

早稲田大学図書館

文書 27

B 1





文名二年壬戌

一正月九日南都春日社前御神鏡相伝
 大官御々奉聞と通付下 疑速奉幣
 と捧付國家奉命と奉と做し給ふ
 一日月十号東武坂上御門と奉名と奉聞
 西條御為守信正奉威名浪士と奉折
 肩先深く切し付らば供人踏歩其戦信正
 廣子身々道れ奉浪士七人討死と奉傳
 子斬り奉死と奉傳七人と奉傳
 子斬り奉死と奉傳七人と奉傳
 浪士前々外國より御御部正利照の家臣
 三島三平奉海部之助細末忠齋吉野助
 少野儀相馬千之助内田高之助等
 孫と供人奉死と奉傳我二十人傳り物形
 奉事奉たじと奉傳奉の奉外奉江奉地
 の奉南館造奉後奉名物奉と奉判

丁酉六月廿二日梅雨奉事 八葉



好意之御殿山之八馬坪と村長之債事先と
議せりしと利懸是と拒み後御諫諍と地
む州州同志と推成と舊心利懸と去州也
此之御部と悟敷と不法則是と責書と呈
しと切指す家子言主人の懸と誓懐
と成る乃と口答言初と意の切と於七人
と家子言其と意匠と細とす
一二月去親子内親王と都城之於と去始相
と大禮河と舊御基所と細とす
一也三月下旬井伊守部頭直憲幕府の
任節一の上京た河の御後自尾能と誓
いとも奉りあり

一島伊能隠大寺中将夜久と去島守和泉从
光之御弟と罷り中り四月に揚州全津
と省中と諸國之浪士數百名和泉之旅館
と幕府之罷り中り幕府と通り攘夷
と御親征と但し自ら人々を募りて幕府と
黨と元中山殿之臣田中河内外並前、脱術

平野次高版指間平大谷雄作青山秋母松
本陣花原勝太鶴田陶自酒井伊治御荒
卷半高中垣鑑太郎安積孝小河清右衛門田
邊信一和目旗官内高川博平彦昭友進兵
野勘部喜人櫻川之武部関山外山林將
監川之彦仰指馬新七橋之此中田中謙助山
田千代高此山登頂初と凡然此西園寺五
郎伊年田高平森山新若之山本四郎一松
榮大竹下越男東政名術野田初七郎村江
省三本太亮宗政順藏堀鑑一和吉と娘の之の
島合之徒二百名原同志と唱へて中平野次高國
臣巨野と白馬河原州と上書於て之と之
大書

去其美幕末西國群と謂れ利之能延清
蔵と恐中興と御約と名一天下將と白城
と藩人との御事と臣才と御事と初
君侯と美武と御事と御事と御事と御事

臣等鑑西の有志と密謀し義兵を志し
 官邸の傍に身を隠し兵馬を蓄えたり
 指令に請ふべき不知はつて今一の志
 傳へし事多し請ふし何ぞか
 謀に神を機合しし何しや
 西海に師南ぬる有志を傳へし
 潜舟一通行を待つる一十月秋に
 拜謁し臣等有志を思ふし
 恢復を基としんん厚其大坂を根二條に
 義兵を募りし師在留し幕末を
 上之志に辭き七道の後、初命を賜ふ
 風聲を函根の嶺末より幕府に
 不可き方を許へん事多し
 泉州草莽の志の誠忠を
 率めて大坂に赴きし
 は時勢の趨勢を思ふ

せんそ己に播州大倉ありて
 平野源平の旧主は
 免角の評議ありし如く
 先年國師を祀りて
 志を遂げんとす
 國師を祀りて
 有志を遂げんとす
 國師を祀りて
 有志を遂げんとす
 國師を祀りて
 有志を遂げんとす

ありしを傳せり口を島津に泉の上を七守を
同志を以て巨魁をたす大なる留卷をす
四月十日島津浪士伏見の駅を看せり伏
見の前より林原に守忠と名ふ者ありけり
揚州の起りたる守忠と名ふ者ありけり
傳せり所を伏見の先けり酒井長徳等
忠義を懐きしもの信忠と名ふ師と認めし計
らんと計難し二條城の指廻し一戦の用意を
おせり天朝の考守り何れ浮浪の徒
果ては説く主張し去りてんと計難し
守らざる為に守ありし所を置ありき
ふ細念を考へ振舞ひて我れ一國の力
を神し法家勢衛し者指し改めし
改めし傳書長徳名成卿坊城亞相
傳書卿より長徳より市中に者あり懼と家
財を以て運い能く振を兵に初極せり
月十日己未刻過島津泉州穂便に入東

ありしを市中諸の石塔身と云事と記す
泉州の園白道衛政と書と云陳述と云は
否東記より幕府の政体と密筆考松岡
旗改め元戊午以来勅諭と書事と改め夫
との通商制と正義の親王三公と始め
水戸越前と水戸和島と外法侯と考く
捕頭と云ふ北流の刑と處し儒と密筆と
世痛らぬ由と云ふ己未の紛亂浪士
と徒の勤王攘夷の議論と云張惲惲激
烈の語り却る國家の擾乱と云却る外夷
と稱すと語りたる中より東武に出府し儀
建日跡すべし今を揚州廻路あり有
の初浪士追て地集りた外夷と云事
中より守忠と名ふ者あり忠義を懐きし
見たりし守忠と名ふ者あり忠義を懐きし

西國に於ては鼓動し京師馳奔し朝廷を措
按し四方を平定せしむる外患内擾を大
亂と懐くし世に於て將軍先能と名付し
京師を屠ぐ身毒し公武一和を表し白以
物論と法廷あらんことを希ふのみ既に我皇
長井雅樂と申すは其の京師を屠ぐし
世に於ては鼓動し京師馳奔し朝廷を措
按し四方を平定せしむる外患内擾を大
亂と懐くし世に於て將軍先能と名付し
京師を屠ぐ身毒し公武一和を表し白以
物論と法廷あらんことを希ふのみ既に我皇
長井雅樂と申すは其の京師を屠ぐし

つゝ有るは流り三月中旬京師を奪ふこ
事と成りし長井雅樂は秀才衆人の
越へ和漢之事情に通し其上博識者
多し京師を看し議奏中山大納言忠能
卿に館に参殿し言上を申す方今宇内の
形勢安んずるは世に於て公武一和を
表し白以物論と法廷あらんことを希
ふのみ既に我皇長井雅樂と申すは
其の京師を屠ぐし世に於ては鼓動し
京師馳奔し朝廷を措按し四方を平
定せしむる外患内擾を大亂と懐くし
世に於て將軍先能と名付し京師を屠
ぐ身毒し公武一和を表し白以物論と
法廷あらんことを希ふのみ既に我皇
長井雅樂と申すは其の京師を屠ぐし

新正出陣ありて彼が築穴を掘り塔を二つ
まを我國の士民に知らしめ皇國の武威を海外
まも興張りせしむる及て理を端へ備へた
論議を著して建白せしむる 於此に島津
和泉先達より上京あり 朝野奮起し折あり
なすも 長井の上京成りてはもあざりたり
生利中將の薩兵を以て 喜望峯の公武の和
に用旋り 銀山撫夷の趣意ありしに 中將の命
に及し 和親を唱へ 佐幕を張り 刺す中將に
上書と諺則り 議奏して 同藩の有志
の皆へて 或は好む 或は罵り 長井を討んと
議ありと 大政を毛利邸の留守指役宛に 在馬に
以て 存心高仰に 志士を 銀の議奏中山大柄
を 参敷し 主之中將の 趣意を 辨解し 雅楽
より 是れし 上書を 賜り 下り 故に 此議を 賜り
濟せし 在馬に 在馬に 長井の 旅宿を 討り 相
對し 論議を 述べ 友上書に 一件丸く 足下を 罪

ながら 畢竟 関虎の 指揮を 務めて 事の 功又
速に 了らんと 余は 是濟を 密書に 傳へ 壯士
は 罪を 恕り 故に 此地を 滞り 却て 害を 招
く 似たり 下先の 江戸を 去り 實らば 説き
服し 長井に 江戸を 傳へ たり 此に 中將
薩兵の 遺書を 見せ 程を 以て 命を 給ふ 故
に 密に 同藩の 有志を 長井に 罪を 告げ 密に 諒
を 討んと 密議を せし 長井に 其の 機を 察す
其 海道を 行人より 密に 道と 掘り 工中 山道を
大坂に 出せ 金庫を 危難に 陥れ 一に 上書
諺則り 罪科を 命を 道に 謝す 又 二年 文に 二
月中 將り 雅楽に 死を 賜ひ 切腹可し 果て
たり 其の 出り 先は 長井に 其の 密書を 傳へ
其の 原良花に 長井に 後を 思ひ 計らひ 恥ん
悔し 後切腹し 死せり 其の 密書を 傳へ 其の
再説 関あり 上方と 浪士 輝起 島津 和泉に 参

守安宅入道攝水先建方所引代了白承
滞京中より一々朝廷向く事案に就くは
有らん之再い加判列位一人中務大輔之無任
あり茲より田安殿之儀見職之辭信不
却して照座を權幸也 敬慮男御せしべし
大原三位重德卿之物任一関東より向ふべし
三月廿一日即ち三位左大臣之任也且五月廿二日
師と發し江上より向ふは省々大事之物任也
島津之師先道中へ發し向ふは共奉せし
けり同務大輔六人鉄砲計器を最奉り
威勢酒ありありせり
相東政多きは市面浪士等亦盛んし
十風より別老姫御侍後酒井忠徳等之
取締り白土東也(一)五月十八日
一六月十日乃京ありし勅使大原島津等共
東武より向ふは利家於江上より渡り
日増盛んし向ふは旭の舞より一関老姫

物任後之儀も恐怖し天機は何れも
潜りて清湯の酒井忠徳等之所代り
東武より向ふは島津忠徳等宗義所代り
之命せし七月初九日言ふあり之男も入京あり
之儀も九州高橋東禅寺より強御所
前人と對面せしあり當り警衛村中
島津伊藤軍兵衛と云ふあり美人二人
軍兵衛之自前より向ふは唯此礼を行あり
怒憤一羽を奪ひ奪りて二名を向ふ
島津自宅より向ふは幕府軍兵衛之邊
より某分隊より向ふは向自教之席次を辨せり
之儀も後儀も怒りし事然り
幕府丹羽等之警衛と止めたり 六月廿二
日之事あり
即ち日月の節師匠所居大原忠熙公之側白
任し獅子玉院の宮より青蓮院より任職再任あり
らせしは乃ち又先達より向ふは水戸前中納言
齋昭卿の果身皇女と云ふは是も中納言の

賊長野を勝る白波野を巧し天地を安んずる
者之誅戮を加ふはこころを力部重なる
口からしつ湯をゆゆえん志高ぶる物

ちやうし一編みりさるまがもうし首の立片
胸の扇を書いて考ひせりけし高田を去る戊午
の秋関東の両者を討つるは信長節を勝る
相謀る官家草莽情懐の相志を流し我を
と有志憤激の堪えり遂に仇を報せり我
は先き関東を討つし勅使大原三位政二有
つて武州品川を看ありて同十日千代田に
城を入り後ふ家成將軍の事の本館
にありし知使と請ひらるる大原三位
知春を以て討つるを記せん大原
治房の功あり我を流し相謀るを幕
末に之利あり天下を治るるは萬民

准吉原に陣せんとも一是の依る所
と悩まされふは御幕末に流るる日本
民協和を以て是を以て脅懾し師を
願ふ皇妹と將軍の嫁もつて許し
るは心と心と一和し天下を人民力を
也連りて為れは移移せしめしなりて
そは任せし和宮関東の國を許す也
しは豈料ぬも策吏益々其秋に親睦し
王家を憂や一日の春もと信あり身と志
を志せしめ美秋に善報を流しとるは不
日のみ國民竹亂就中以後東西を浪士大
衆し聖徳を以ては信あり好吏と誅
し徳を擲失するんは夫れもは信長の二倍
もこれを見るは公卿を輔るは信長の二
倍と國旗將軍を以て上流を仰し公卿大夫
と共謀し王威を以て今とて不自擲夫の成功

と遂に六祖神の宸居を慰の下に為民和意
の甚きしに天々を居し安き比し二人
豊天國の故史より沿海の大南書に
五大老と云ふ國の故史より安通を以し
功傷を以て白撰夫に切り去るべし三を
一橋刑部卿を移し之を輔に之を以て
中將を大志職に任ずり幕府内政を
輔佐し當りて祖志の成るを以て三
事の中の一ツを以て仰せ遣せしむる
將軍初命を拜兼有截し之にして
七月朔を以て初命を以て初命を以て
一橋刑部卿
らに問ひて 願望を尊奉し一橋刑部卿
の中程を以て初命を以て初命を以て
と以て事 従裁職を任ずり又御意を
と秘せし 和宮御方を和宮様と稱し之

夫より久世に和宮御方内藤氏に伊予守信忠を孫
初命を尊奉すとの福を以て蒸飯を以て八月廿日
大原殿に武を奉る由あり 鳥羽後大原卿
の先を以て二十日東武を奉り一州生麥村に
至り初命の時を以て英吉利の士官馬止を以て駈り
鳥羽後を以て行利を以て新切りたる先代の是程より
無禮を以て即ち三人を以て致し幕府を
英人をも禮のたゆみを以て 其後幕府に進
まれり初して大原守徳卿 田八月十六日佛
舟の由あり 初命を以て大原卿鳥羽後より
印傍を以て當りて重徳卿に其意を許し初命鳥羽
三命を以て從五位下大原守を以て初命を以て
其幕府を以て進めし初命を以て一橋刑部卿を以て
初命を以て 其後幕府に進めし初命を以て
進めし初命を以て 其後幕府に進めし初命を以て
賜り鳥羽後を以て施し同升す幕府を以て

底之用意を以て之を記し出傷に付物子高都
使者あり中川久昭を責りて而不現今
玉に訪

